

歴史的街区における景観評価に関する研究 —京都市中京区における立面形状による一考察—

日大生産工 (院) ○村山 大基
日大生産工 宮崎 隆昌

1.はじめに

1.1.背景と目的

今日,日本は高度経済成長などの社会変化によって街並みが急速に都市化し,歴史的街並みから,画一的な均質空間を指向する建築が溢れるようになり,我が国固有の景観は失われてしまった.

一方京都では,景観法の制定や,住民の景観への高い意識によって近年まで歴史的景観の街並みを保ってきた.だが建築基準法の改正とともに,町家を維持することが困難となり,また築50年以上という歳月から老朽化による建て替えが始まり,建築法の基準をクリア出来ない町家は減少の一途をたどっている.今一度,街並みを見直し,再評価する事で,現在減少傾向にある外国人観光客への魅力の回復,引いては京都としての地域空間の特性を保つためにも,伝統的建築物(以下町家), 町家風に建て替えられその意匠を継承した建築物(以下町家風建築物¹⁾)を始めとする市街地の街並みによる景観保存は緊喫な課題であると言える.

よって本研究では,通りに面した建築物のファサード面に注目し,町家要素がファサードに含まれている割合を数値化することで,これからの京都の美しい街並みを保つための指針となるデータを作成することを目的としている.

1.2.既往研究との位置付け

町家のファサードに関する研究として川

崎ら²⁾の研究が挙げられる.川崎らは町家をいくつかのエレメントに分類することで,変化のある町家をいくつかの要素に分解した.

また,ファサードで重要な意味を持つ外壁色の研究として戸所ら³⁾の研究が挙げられる.戸所らは,町家の持つ色が自然色に近い暖色と白,黒の無彩色によるものであるとし,また町家風建築も同様であると定義している.

そこで本研究では,川崎らのエレメントと,戸所らの外壁色を町家要素とし,それらが外壁に含まれる割合により町並み景観の数値化を行なうものとする.

2.研究概要

2.1.対象地域

歴史的町並みが残る地域の一つとして,京都が挙げられる.他地域との外国人観光客

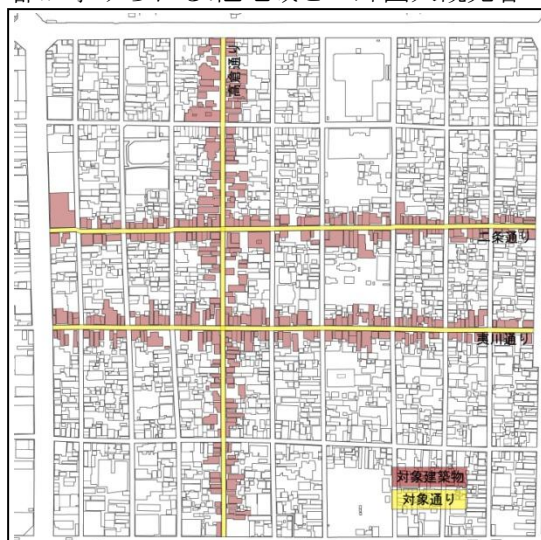


Fig.1.対象地域

A study on the Scene Evaluation in the Historic Area.

-A study on the Vertical Plane Shape in the Nakagyo-ku,Kyoto-shi.

Daiki MURAYAMA and Takamasa MIYAZAKI

を比較しても、市街地景観は最も維持され守られていると考えられる。また、その中でも京都市中京区内にあり歴史的景観を強く残す二条通り、建具・家具屋街として広い年代の建物が並ぶ夷川通り、戦前からの町並みを多く残し、二条通り、夷川通りをつなぐ高倉通り、計3通りに存在する409軒の建築物を対象に調査を行う (Fig.1.)。

2.2. 調査方法

2011年8月8日～12日までの5日間、対象地域によるファサードの写真撮影を行い、これらのデータを分析に用いる。

2.3. 研究方法

景観に最も影響のある1.2階部分のファサードを調査対象とし、川崎らの提唱する町家のエレメントである

表屋造り：虫籠窓、格子戸、軒瓦、尾垂れ、幕掛け、格子窓(糸屋格子、連子格子、目板格子、親子格子、麩屋格子)、板暖簾、戸袋、連続しない土壁

塀造り：目板瓦、庇、連続する土壁の割合⁴⁾ (Fig.2.)と、戸所らの提唱するR(Red)～YR(Yellow-Red)～Y(Yellow)までの暖色と白、黒色の無彩色との外壁色の占める土壁を持つ建築物⁵⁾を通りごと、エレメントごとに数値化し整理する。

3. エレメントの内訳

川崎らによって提唱されたエレメントをそれぞれの位置関係から細分化する。

窓面：虫籠窓、格子窓、板暖簾、戸袋

屋根：軒瓦、目板瓦、庇、幕掛け、尾垂れ

壁面：土壁、暖色・無彩色の塗り壁

戸：格子戸

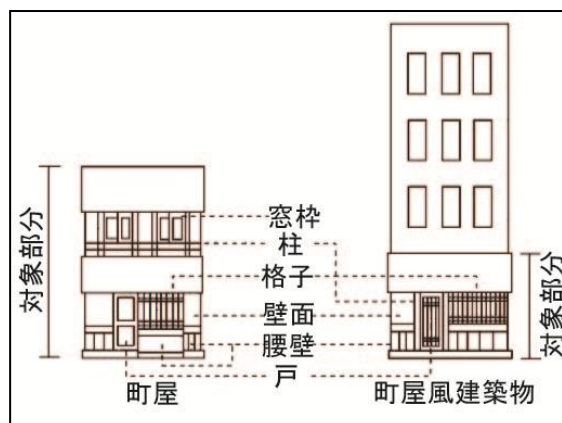


Fig.2. 対象部分・対象部位



Fig.3. 伝統的建築物(町家)



Fig.4. 町家風建築物

ファサードの4要素においてこれらのエレメントが確認できた建築物を町家とし,要素を持ちながら現代への転用が見られるものを町家風建築とし,これらを建物ごとに分類し,整理する(Fig.3.Fig.4.).

4. 結果

通りごとに東西,南北に分類,カウントしたものを建築物総合分析表として記す(Tab. 1.). 通りごとの建物総数,窓面,屋根,壁面,戸の結果,またそれぞれの要素ごとの結果をグラフに示す

(Fig. 5. Fig. 6. Fig. 7. Fig. 8. Fig. 9. Fig. 10. Fig. 11. Fig. 12. Fig. 13. Fig. 14.).

5. 考察

まず,それぞれの要素ごとについてまとめる. 建物総数においては2004年,戸所らの調査時3%であった町家風建築が約5倍の16%に増加している事が確認できた⁵⁾(Fig. 10.). これは,住民の景観への配慮と京町家の店舗などへの用途転換による需要が高まったためと考えられる.

エレメントごとに確認すると,壁面に対しては町家要素の割合が全建築物の52%に達しており,高い街並み保全が見て取れた(Fig. 11.).

一方,戸に関しては全体の20%しか格子戸(木製格子)は確認できず,今後意識的に数値を高めていく必要がある要素だと感じた(Fig. 14.).

次に通りごとの分析に入る. まず,建築物別データにおいては,夷川通りのみ法改正後,町家風建築物に建て替えられた建築物が町家よりも多い事が確認できた(Fig. 5.). これは,夷川通りが古くからの家具屋通り

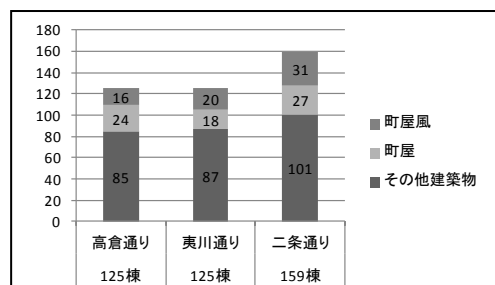


Fig. 5. 通りごとの建築物別データ

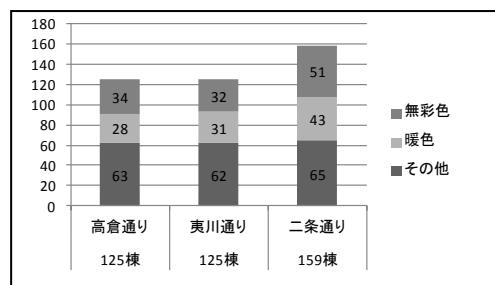


Fig. 6. 通りごとの壁面データ

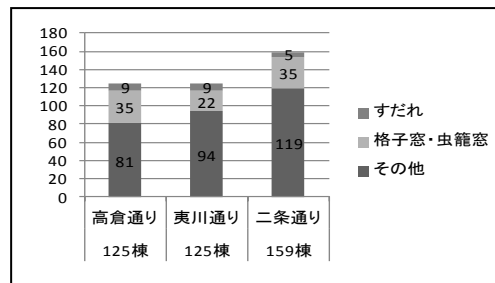


Fig. 7. 通りごとの窓面データ

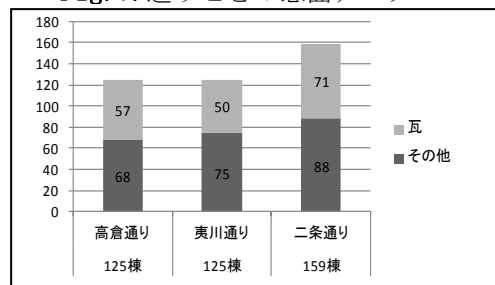


Fig. 8. 通りごとの屋根データ

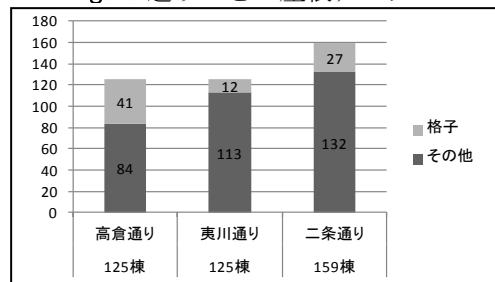


Fig. 9. 通りごとの戸データ

であるため、町家の用途転換やリノベーションの価値が他地域よりも高かったためと考えられる。また、通りごとの戸データにおいては夷川通りが最も格子戸が少ないことが確認できた (Fig. 9)。これは先に述べた様に、家具屋通りであるため、現代ではガラス張りで店内を見渡せるよう配慮した町家が多く存在しているためと考えられる。

6. 研究の今後の課題

今後、さらに広範囲のデータを採取することにより、より詳細で明確な京都らしさの指針になると考えられる。また、今回個数によって建物ごとの分析を行なったので、奥行や大きさを加味し面積からの分析を行うことでより美しい街並み景観への新たなデータを得ることを目的としたい。

「参考文献」

1) 立命館地理学 第16号(2004) P116
京都における町家と町家風建築物からみた「地域の色」の継承と創造 戸所 泰子

2) 4) 平成2年度日本建築学会近畿支部研究報告集 P265 京都の伝統的町屋のファサード構成に関する研究 川崎 清

3) 5) 立命館地理学 第16号(2004) 121～122P
京都における町家と町家風建築物からみた「地域の色」の継承と創造

歴史的街区における街路空間の構成に関する研究
-開口部からみる住宅ファサードについて-

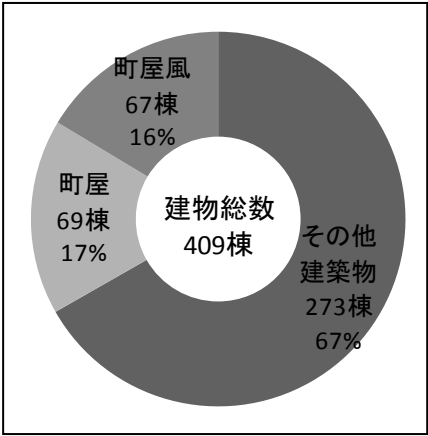


Fig. 10. 建築物別データ

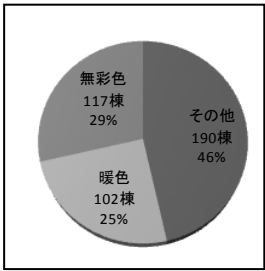


Fig. 11. 壁面データ

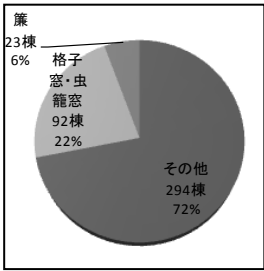


Fig. 12. 窓面データ

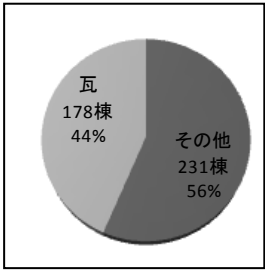


Fig. 13. 屋根データ

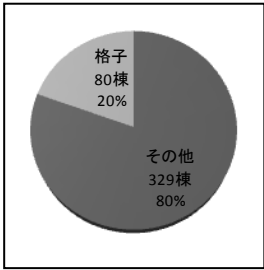


Fig. 14. 戸データ

Table. 1. 1. 建築物総合分析表

	建物総数	建築物	町屋	町屋風	格子口	瓦	暖色	無彩色	格子窓	すだれ	駐車場	空き地	工事
高倉通り縦西側	56	36	11	9	24	30	17	7	19	2	1		
高倉通り縦東側	69	49	13	7	17	27	11	27	16	7			1
夷川通り横南側	57	39	9	9	6	26	15	15	12	2	8		1
夷川通り横北側	68	48	9	11	6	24	16	17	10	7	5		
二条通り横南側	86	59	13	14	15	32	27	20	21	3	8	1	1
二条通り横北側	73	42	14	17	12	39	16	31	14	2	9	4	
合計	409	273	69	67	80	178	102	117	92	23	31	5	3